

聖路加市民アカデミー 2012 開催 「自分らしく生きる」を支えるために

去る 10 月 22 日、聖路加看護大学アリス・C・セントジョンメモリアルホールにて、聖路加市民アカデミー「自分らしく生きるための心の準備」が開催された。

開会の挨拶において福井次矢氏（聖路加看護学園理事長）は、聖路加国際病院では 3 年前から「私のリビングウィル」という、終末期治療について自らの意向を示すための用紙を数千人に配布しているが、実際に電子カルテに記載しているのは 44 人しかいないという現状を述べた。医療者だけががんばっても、よりよい医療を提供していくことはできない。市民講座などを通して、医療を受ける側の意識変化を促すことも病院の果たすべき重要な役割といえる。

10 月 4 日に 101 歳を迎えた日野原重明氏（聖路加国際病院理事長・同名誉院長、聖路加看護学園名誉理事長）は、何歳になっても若さを保つ方法は、常に新しいことに取り組むことだと言う。「自分にできることは何か。考えるだけでなく、思い立ったらすぐ行動する。機会は前から来るのではなく、行動する人に与えられる」。高齢者だけでなく、自分らしい生き方をするためにすべての人に伝えたいメッセージだ。

講演は、上野千鶴子氏（東京大学名誉教授、NPO 法人 WAN 理事長、立命館大学特別招聘教授）による「おひとりさまの最期」。今後、一人暮らし高齢者が増えることが予測されている。生涯未婚者の増加、



既婚者の離婚、離別、子どもとの別居、子どもも高齢になり先立たれることもあるだろう。家族頼みの老後はもう成り立たない。これは、医療の現場にいて、感じている方も多いのではないだろうか。

一方で、同居していても課題はある。家族介護は、家族を精神的にも肉体的にも追い詰める。待機高齢者数については諸説あるが、自ら望んで介護施設に入る高齢者はどの程度いるのであろうか。ケア付きの高齢者住宅の建設が進んでいるが、サービスや環境に課題のある施設も少なくない。また、入居時には納得できる水準の施設であっても、それがいつまでも保たれるという保証はない。今の 60～70 代は持ち家率が高い。自宅で、適切なサービスを自ら比べて選んで受けられればよいのではないか。

かつては家族がいない人には在宅介護の選択肢がなかったが、今は介護保険により、単身世帯でも在宅で暮らせるようになってきた。一人暮らし高齢者は貧困率も、生活保護受給率も高く、お金がないという問題もあるが、金銭的負担は必ずしも在宅のほうが多いわけではない。何より患者の幸せを考えたとき、病院や施設と住み慣れた在宅、どちらで終末を迎えたいだろうか。



上野氏は実際に地域医療の現場をみてまわり、暮らしを面で支える介護力、線で支える看護力、点で支える医療という多職種協働があれば、在宅一人死は可能だという。家が病室、地域が病院、病院がナースステーションと考え、地域をそのまま看取りの場にできればよいのではないか。そのときの地域医療の主役は医師ではなく看護師だ。トータルヘルスマネジメントを行なうことで豊かな高齢期を実現できる。

会場に集まった市民たちも、在宅療養の実際に大いに興味を示していた。来る 2025 年に向けて、医療者・市民双方の意識改革を図り、より健康な暮らしを支えてほしい。